パウル・ツェラン――「ゴル事件」と精神病の発病

Paul Celan: Die Goll Affäre und der Anfang der Geisteskrankheit Celans

北　彰

要　旨

「ゴル事件」とは、イヴァン・ゴルの夫人クレールによって引き起こされた事件であり、ツェランの詩が、ゴルの詩の剽窃であるとする誹謗中傷の風説をドイツ社会に広めようとしたものである。とりわけ一九六〇年には中傷キャンペーンが広まった。デールの報告書により誹謗中傷であることが明らかになったが、この事件によって受けたツェランの精神の傷は大きく深いものだった。本稿はその事件の経過を記すとともに、この時期に発病したと思われるツェランの迫害妄想の様相を示していく。ツェランにとって「狂気」は以後の彼の人生を規定していく大きな要素となった。

キーワード

ゴル事件、クレール・ゴル、中傷キャンペーン、被害妄想、友情の破壊と孤立

はじめに

「ゴル事件」と呼ばれているのは、イヴァン・ゴルの夫人、クレール・ゴルによって引き起こされた事件である。ツェランの詩が、イヴァン・ゴルの詩の剽窃であるとする誹謗中傷を、広くドイツ文学界に風説として広めようとしたものである。

事件そのものは卑劣極まりない事実歪曲でしかなかった。しかし長く続いたこの事件によって引き起こされたツェランの精神の動揺は大きく、また受けた傷はひどく深いものとなった。彼の被害妄想の引き金になったのではないかとも考えられるのである。「ゴル事件の影響を過大視し過ぎるということはない。パリでのおよそ二〇年間にわたる人生に影響を与え続けたのだ」[1]とバルバラ・ヴィーデマンは言っている。

以下このゴル事件なるもののおおよその経過を簡単に追ってみたいと思う。直接論じたもの以外にも多くの出来事があり、多くのやり取りがあったが、すべてを追いきることはできないので、アウトラインのみの記述となる。

そもそもゴル夫妻とツェランの出会いが幸福なものだったことは、すでに述べてきたとおりである。クレールはツェランに多くの手紙を出しているが、その呼びかけには、「可愛いパウルちゃん」というようなものさえある。ツェランにクリスマスプレゼントを贈ろうとしたり、詩集『ケシと記憶』刊行に助力したり、ゴル逝去一周年記念の集いにはツェランに同行を依頼したりしていたのだ。

ツェランとクレールが最初に出会ったのは一九四九年、ツェラン二九歳、クレール五九歳の時である。クレール

は男性にとって魅力的な女性であり、実年齢よりも一〇歳ぐらいは若く見えたらしい。とするならツェランが会った時に五〇歳前後に見えても不思議ではない。若い美青年のツェランに懸想してもおかしくはないであろう。

一　事件の始まり

イヴァン・ゴルはツェランが会ったとき白血病に侵されており、会った翌年の一九五〇年に亡くなっている。ツェランは入院しているゴルを頻繁に見舞った。ゴルのことをツェランは、「本物の詩人」であり「パリで出会った人たちの中で真の人間と言える最初の人だ」[2]と評している。

ツェランの詩的才能を高く評価していたクレールはゴルがフランス語で書いていた三冊の詩集の独訳をツェランに依頼した。ツェランはそれを一九五一年までに成し遂げる。しかしスイスの出版社からは、訳が原詩とあまりに離れているとの理由で出版を拒絶され、しかも訳稿はツェランの手元にではなくクレールに戻ったのである。

ツェランは出版社に抗議の手紙を出し、同時にクレールに、訳の仕事について口頭で約束していた内容を文書化するように要求する手紙を書いた。一九五二年一月四日のことである[3]。それに対してクレールは「何と不遜な！」と激怒し、一月二六日付の手紙では翻訳料一万フランを支払っているではないかとも述べている[4]。二人はパリにいたので、この間電話でのやり取りもあった。一九五二年一月二九日が二人の会った最後の日と推測される。ジゼルのツェラン宛の手紙によれば、金を貸したのはツェランの方であったようだ[5]。これを最後に二人の関係は途絶する。

クレールは訳稿返却のツェランの要求を拒絶したばかりか、その後自分が独訳したものであるとして、おそらく

ツェランの訳に手を加えたゴルの詩の独訳を刊行していくのである。

【一九五三年の回状】

ゴル事件は一九五三年にクレールが出版社や新聞社それに放送局など宛に、ツェランを侮辱非難する回状を出したことに始まっている。ツェランの作品が、これらの媒体を通じて広く世に知られ、彼が有名になることを妨げようとするもので、大要次のような内容が記されていた。

カリフォルニア大学ドイツ文学科准教授と会った際に、ツェランの『ケシと記憶』に収められた詩が、ゴルの詩集『夢草』に収められた詩とよく似ているという指摘を受けた。実際以下の具体例で示したように多くの相似箇所がある。ツェランがゴルの詩を模倣できたのは何篇かのゴルの詩を訳してみたからである。それを私はツェランを世間に認めさせたいがゆえにツェラン訳としてラジオで朗読もした。実際はゴルが手助けしてできた訳なのだが。

ゴルは自分が死んだときに私が後を追うことを恐れ、ツェランを養子にしたいと思っていた。それを知ったツェランは良い子ぶったが、そのカモフラージュをゴルは見破った。ゴルの死後もツェランは私の周りに出没した。金を必要としていたからだ。ゴルの仏語で書かれた薄い詩集を一万フランで独訳したいがどうかと提案してきた。私は彼に一万フラン支払った。彼はすぐ金を必要としていたので、訳業をいい加減に短時間のうちに終えた。彼の訳を出版社は原詩に似つかわしくないものとして拒絶した。

金づるを手放すまいとして彼は出版社や私を弁護士を使って手紙で脅してきた。私がホテルを去る前には、「イヴァンに輸血さえしようとしたのだ！」と叫び、また「自分をイヴァンは遺言状で彼の作品の遺産管理人としたのだ」とも言った。文学と血と何の関係があるだろうか。遺産管理人となるのは私がゴルと同時に死んだ時だ。

ツェランは一度ならず「私の訳を見せろ、比べてみようではないか」と言った。私が詩人の妻としてツェランよりゴルに身近におり、しかも彼の言葉に心服しているという事実すら彼の自惚れには思いもつかないことらしい。

「借用」がツェランの詩の特性であることは現在ニューヨークに住んでいるウィーンの詩人も指摘するところである。彼はルーマニア時代からツェランを知っており、長く強制収容所仲間でもあった。ツェランが最初に出版し後に引っ込めた詩集『骨壺からの砂』も、外国では知られていないルーマニアの有名な二人の詩人からの「借用」である。人間ツェランを彼は「一人の完璧な偽善者」と表現したが、それに付け加える言葉を私は持たない。(6)

この回状はほとんど効果を持たなかった。一九五四年三月になってツェランはフィッシャー書店の原稿審査員ルードルフ・ヒルシュから初めてこの回状について詳しいことを聞いたのである。「真面目にとる者は誰もいない」というのがヒルシュのツェランに対する言葉だった。この後もツェランを誹謗中傷する匿名の手紙が出されたりするが大きな反響を呼ぶことはなかった。

二　一九六〇年の中傷キャンペーン

世の大きな反響を呼ぶようになったのは一九六〇年のことである。この年クレールがミュンヘンの雑誌『飯場詩人』四月号に「知られざるツェラン」という公開書簡を掲載した。内容は先に紹介した「回状」と大同小異である。ただゴルとツェランの詩の相似性を指摘したカリフォルニア大学准教授としてリヒアルト・エクスナーの名前が明記され、『年輪』一九五五／一九五六年号にクルト・ホーホフがツェランとゴルの詩行を取り出して比較していることが新たに指摘され、また一九五六年に開かれた東独における作家会議でゲオルク・マウラーがツェランを評して「剽窃の名人」と発言したことが紹介されていた。(7)

【一雑誌から全国に広がっていった誹謗中傷】

小さな雑誌に掲載されたクレールの文章の殆ど全体が、数週間後に『ブレーメン新聞』に掲載された。『ブレーメン新聞』は北ドイツのみならず他の地域でも広く読まれていたため、「ゴル事件」が全国規模での「スキャンダル」となっていくのに力を貸したものと思われる。二年前にツェランがブレーメン文学賞を受賞していたことが、この報道に繋がっていったのではないかとも推測される。

一九六〇年一〇月八日には、スイスの新聞『行為』紙が、同年一〇月二七日には『キリストと世界』紙が、そして一一月一一日には全国紙の『世界』がライナー・カーベルによるツェラン攻撃の記事を掲載した。とりわけ『世

界』紙は全国紙であり、それが持つ影響力は大きかった。ちなみに『世界』は、当時の西ドイツ国内で政治的に最も右翼に位置すると見られる新聞である。

一〇月二二日にツェランが西ドイツ文学における名誉ある代表的な賞である「ビュヒナー賞」を受賞したこともこの騒動に油を注いだことだろう。まさに「時の人」に関わる「スキャンダル」なのだから。

【ツェラン側からの反駁】

ツェランは、一九六〇年五月三日にパリのドイツ書籍店フリンカーで『飯場詩人』を発見、すぐさまその日のうちにヒルシュに電話をかけ、また手紙を書いている。五月一〇日にはボンにいたオットー・ペゲラーと会い、この件について相談し、一三日にはフランクフルトでヒルシュ及びフィッシャー書店の弁護士同席のもと、善後策を検討している。騒ぎ立てるのはかえって事を大きくするばかりなので無視するのが一番の策だということになった。しかし事件が広がっていったのは先に記したとおりである。

一九六〇年九月には、『新展望』第三号誌上に、バッハマン、カーシュニッツ、デームス三人の連名で抗議声明が掲載された。声明文作成にはツェランもまた深く関与していた。また一一月一八／一九日号の『新チューリヒ新聞』にはペーター・ソンディの記事が掲載された。クレールの「公開書簡」や一一月一一日に『世界』紙に掲載されたカーベルの記事が、事実と異なるものであることを詳細に立証反駁したものである。

また例の『世界』紙には、エンツェンスベルガーが「ツェランの件について言われねばならぬこと」と題する投書をしている。ライナー・カーベルの記事を読み、掲載当日すぐさま書きあげ新聞編集部に向け郵送したものであ

る。その投書を編集部は、時期を遅らせツェラン攻撃の文章と並べて、遅くになってようやく掲載したのである。「単なる老女のパラノイアというばかりではないそれ以上のものがこの事件には関与している」とエンツェンスベルガーはツェラン宛の手紙に書いていた[8]。反ユダヤ主義の存在を示唆するものである。

翌年の一九六一年一月一〇日には、『シュトゥットガルト新聞』紙上でビュヒナー賞歴代受賞者六名が連名でツェラン支持の声明を出し、オーストリアの一一名の作家詩人も誹謗キャンペーンに対する抗議の署名をしている。

【リヒアルト・エクスナーのケース】

雑誌『飯場詩人』に掲載されたクレールの公開書簡中で、「ツェランの詩集『ケシと記憶』が「夢草」の全くの借用である」と指摘したことになっているエクスナーのケースは、クレールの言明が如何に虚偽に満ちたものであるかを端的に示している。

ロサンゼルス南カリフォルニア大学ドイツ文学科卒の学生だった彼は、元来ツェランを高く評価しており、ツェランについて書きたいと思い、一九五三年八月五日付でツェラン宛手紙を出している。ただその中で、「イヴァン・ゴルの痕跡をあなたの詩の中に発見したと思ったが、それは正しいのかどうか、あなたのお考えを聞かせてほしい[9]」と書いたことがツェランの気に入らなかったのであろう、ツェランは返事を出さずじまいだった。

実はこの手紙は彼がクレールに会った二日後に出されている。クレールは彼によって初めてツェランの詩集『ケシと記憶』に収められている詩を知ったのである。この出会いをクレールはいいように利用した。

別件でエクスナーは、アルフレート・アンデルシュ宛一九五六年一〇月一三日付の手紙の中で、クレールの「回

状」から派生した事態についてであろう、「〈大いなる不正〉がツェランに加えられたのだとしたら、それは私によってではない」と記し、「クレールとツェランの関係の真実を知ろうとして二度ツェランに手紙を出したが返事をもらえなかった」と書いている。「私の名が使われないことを望む。ツェランにこの手紙の内容を知らせてほしい」[10]とも書いていたが、一九六〇年になってもなおクレールはエクスナーの名前を利用していたことが分かる。しかもエクスナーの肩書は「大学准教授」であった。

エクスナーはヒルシュ宛にも一九六〇年七月および八月と二度にわたり手紙を書いていた。最初の手紙では、事実を告げると同時に、「でっち上げの共犯者」などと呼ぶのはやめてほしい、「三〇分も会って話をすれば分かるはず」と書いている。[11]『飯場詩人』のクレールの公開書簡を読んだ後の二度目の手紙では、「クレールには病的コンプレックスがある」「ツェランの人格攻撃になっているのは許せない」「文学者の声明より法廷闘争を」と書いていた。[12]コピーがツェランの遺稿中に残されていることから、この八月の手紙はツェランにも伝えられていたことが分かる。

ようやく一九六一年五月になってツェランはエクスナーに手紙を書いている。同年八月、エクスナーの記憶によればパリでツェランと会うことになっていたが、約束をすっぽかされて二人が会うことはついにないままだった。

一九六四年六月になってエクスナーはツェラン宛の最後の手紙を書いている。パリでお会いできなかった時から既に三年経った、ずっと悩み償いの気持ちを持っている、あなたのお仕事に大きな関心を寄せている、アメリカに来られるという話を聞いたが、それが本当なら私の大学に来てほしい、せめてお会いできないか、良いお仕事を願っている、といった内容であった。[13]当時彼はオハイオ州オーバリン大学で教えていた。彼が良心的な人であったことが分かる。

【ビュヒナー賞返上の試み】

ツェランがビュヒナー賞受賞内定の知らせを電話で妻ジゼルから受けたのは、一九六〇年五月一四日のことであった。ツェランはドイツに滞在していたのである。新聞報道がなされたのは五月一九日である。当初彼は喜んで賞を受ける旨をヘルマン・カーザク宛の手紙で記していた。ゲオルク・ビュヒナーは稀有の文学的才能の持ち主であり、また鋭い政治批判も行った人である。「この賞を授与されるということは、私にとっては出会いを意味します。人間への接近、魂のモナドとしての人間のうちの価値ある一つの名との出会いを意味します」[14]とカーザク宛手紙の中でツェランは記していたのである。

ところがその彼が賞の返上を考え始める。賞を授与する側のドイツ文学アカデミー会員の中に、ゴル事件の加担者とツェランがみなす人間が含まれていたからである。返上の意志を表明するカーザク宛の手紙、その便箋の上余白には、「イヴァン・ゴルの未亡人の策謀のせいで、このイヴァン・ゴルという名前が、窃盗・欺瞞・歪曲・ナチズムの犠牲者に対する嘲弄、と同義になった」と記され、また便箋裏には「文学は真実を求めます。ドイツ文学アカデミーの賞を受けることは、意図的にそれを無視することを意味するのです」[15]と書かれていた。

ツェランの本質論的思考と言えばよいのか、彼が本質ないし事の核心とみなした一点に集中して思考を働かせ、そこから物事の判断を即決していく思考の在り方が見える。会員には様々な人間がいるだろう。組織においてそれは当然のことである。しかしツェランにとって彼が考える「本質・核心」から逸脱した者が一名でもいることは、その組織全体を否定するに足ることなのである。「許容範囲としての誤差」などという考え方は彼にはない。純粋な考え方と言えばよいのか。彼から見て純粋でないものは真実ではないのだ。

名誉ある賞の返上を普通考えるだろうか。ビュヒナー賞はドイツ文壇にあって最高の賞と考えられているのだ。しかもまさに剽窃キャンペーンが行われている最中に賞の返上を言い出すことは、「身に覚えがあるゆえの返上」という誤解を生みやすいであろう。しかしツェランはその常識に逆らって賞の返上を考えるのである。彼の激高ぶりが如何にすさまじいものであるかが窺われる。

しかもビュヒナー賞を返上することこそが実は真の意味でビュヒナー賞を重んじることになるのだ、という考えが見て取れる。ツェランの作品に頻出するパラドクス思考がここにも表れているようだ。あるいはそれほどにツェランは真面目真剣に「ビュヒナー賞」の価値や意味を考えているのだとも。

賞返上の考えはマリー・ルイーゼ・カシュニッツにも伝えられた。それを聞いたカシュニッツはそれを思いとどまるようツェランを説得するのである。「賞を受け容れるべきだ。自分やあなたの友人があなたを偉大な詩人として祝福するのをあなたは許容すべきだ」[16]と言って。おそらくその説得が功を奏したのであろう、ツェランは最終的にはビュヒナー賞を受賞する。その授賞式で受賞祝辞スピーチを行ったのがカシュニッツだった。

三　デールの報告書

これだけのスキャンダルとして騒がれた事件である。ドイツ語・ドイツ文学アカデミーも放置しては置けず第三者委員による調査を行うことになった。フリッツ・マルティーニがその責にあたり、実際に調査を行い報告書を作成したのはマルティーニの許で学位論文取得準備中のラインハルト・デールである。

【マルティーニとデール】

マルティーニは、一九三九年ベルリン大学助手を振り出しに、一九四三年シュトゥットガルト工科大学准教授となり、五〇年以降七五年まで教授として引き続き同大学で教鞭をとった。彼の著作『ドイツ文学史』は文学史の定本とも言われた。しかし彼はナチ時代、ナチ党員であり突撃隊員でもあった。戦後は一転して例えばユダヤ人作家ヤーコプ・ヴァッサーマンの作品の後書きを書いたりしている。「どのような気持ちで彼はこの後書きを書いたのだろうか」[17]とツェランはデームス宛手紙でマルティーニを皮肉っていた。

ツェランはマルティーニの経歴を知っていただけに、その彼が任命したデールにも最初から不信感を持っていた。しかもデールはひとかどの研究者とは言えぬ者であり、そういった人物に調査を命じること自体、ツェランを幻滅させるものだった。そのうえ後には、デールが雑誌でツェランの詩がゴルの影響を受けたものである旨の記述をしていたり、またクレールから著作権上の許可を得ようとしてクレールに手紙を出したりしていることを知って、その不信感を増大させたのである。

【報告書に対するツェランの否定的評価】

それでも一九六一年五月に出された報告書によって一般世間におけるツェランの嫌疑は晴らされることになった。『世界』紙もそれを認めたのである。常識的に言うなら、自分への嫌疑を晴らしてくれた報告書、およびその報告書の作成者に対しては、感謝の念を持ちこそすれ、否定的評価を下すことはあまり考えられないであろう。

しかしツェランのこの報告書に対する評価は否定的なものであった。クレールが訳稿に手を入れて改ざんした事

実を明確に指摘していないこと、文献学的に綿密な調査をしていないことなどがその主たる理由だった。

雑誌『飯場詩人』に載ったクレールの「公開質問状」を見たツェランが、すぐにドイツに赴き、ペゲラーやヒルシュと相談したことは先に述べたとおりである。おそらくそのドイツ行きの車中で書かれたと思われるメモには、イヴァン・ゴルの独訳作品集を市場から引き上げるように出版社へ要請することや、クレール・ゴルをペンクラブから除名すること、またエクスナーの大学からの排除を要求することなどが当然の要求として記されていたのである。[18] このツェランの要求から見るならば、デール報告書に対する否定的な評価も理解できよう。

世間もツェラン周囲の友人達も、この報告書の公開により、「ゴル事件」という「スキャンダル」は「一件落着」と考えた。しかしツェランにとっては「一件落着」ではなかったのである。ツェランと周囲の友人たちとの間に存在する報告書に対する評価のあまりにも大きな落差は、ツェランの態度に対する友人たちの怪訝な思いや理解不能の思いを増大させていった。不幸なことである。

四　ゴル事件と反ユダヤ主義の結合

「反ユダヤ主義」という言葉がツェランの文章には頻出する。その理由は明白であろう。幼少期からユダヤ人として差別を受け、しかも「反ユダヤ主義」の極限的現象であったナチにより、愛する母と父を殺され、自分も九死に一生を得る体験をしてきたのだから、ツェランが反ユダヤ主義的言動に鋭敏に反応するようになるのは当然のことである。「反ユダヤ主義」という言葉が頻出するのは自然な成り行きであろう。

またナチズムないしナチズムの変種であるネオナチに対する警戒心、恐怖、不安の大きさは、おそらくナチズムを身をもって体験していない者には想像もつかないほどの大きさであることは絶えず心にとどめておく必要がある。「過敏に過ぎる」と言われるほどの反応、その反応を生み出す不安感や恐怖には根拠があるのだ。

ゴル事件が起きた頃は、例えば一九五九年一二月のクリスマスにケルンのシナゴーグにナチのスローガンがペンキで殴り書きされたり、ドイツ各地のユダヤ人墓地が荒らされたりという事件が頻発したのである。一九六〇年二月二〇日付のネリー・ザックス宛手紙の中でツェランが「毎日腹立たしい事件の知らせが私の許に舞い込みます。私の言うことを信じてください。毎日です。私たちユダヤ人に何が迫っているというのでしょう」[19]と書くほどだった。

しかし「ゴル事件」を反ユダヤ主義の表れと解するのは容易ではない。なぜならクレールもユダヤ人であり、ユダヤ人が同じユダヤ人のツェランに対して攻撃しているからである。なぜツェランはゴル事件を反ユダヤ主義の一環と捉えたのだろうか。

【反ユダヤ主義のツェラン意識内部での拡大】

ユダヤ人の中には、ユダヤ人であることを憎悪する者がいる。複雑な精神的心理的現象であるが「ユダヤ人の自己憎悪」として知られている。ヴィーデマンはクレール・ゴルを評して「まさに典型的なユダヤ人の自己憎悪の一例である」[20]と言っている。自己憎悪であれ何であれ、それも「反ユダヤ主義」の一類型であり、しかもユダヤ人による「反ユダヤ主義」ということになる。

そして勿論ナチズムやネオナチなどに代表される極限の「反ユダヤ主義」がある。

また「反ユダヤ主義」は、元来同じ人間同士であるにもかかわらず人間が人間を差別する考え方である。「反ユダヤ主義」が横行する現実に対して関心を持たず傍観者の位置にいる者も、無意識のうちに「反ユダヤ主義」に加担している「反ユダヤ主義者」の片割れとみなすことができる。

そして「助けるふりをしてこの事件を長引かせようとする者」。すなわちゴル事件でツェランの弁護に回った人たちも、その弁護は見せかけのものに過ぎず、本音は実は反ユダヤ主義なのではないかという猜疑がツェランの心の中に生じるのである。どす黒い疑惑である。そこに、一連の現象は実は背後で網の目のように互いに関係しているのではないか、と考える関係妄想が加わって行く。こういった猜疑や妄想が膨らんで行き、現象背後にあって現象を操る目に見えぬ巨大な力の存在があるのではないかという考えに囚われて行くのである。後にはその疑いが確信に変わって行く。確信に変わった時点で、リベラルないし左翼に位置するツェランの友人たち、ツェランの擁護者たちも、ツェランの意識内部では反ユダヤ主義者となって行くのである。

ツェランを助けようとした人たちがツェランから信用されず猜疑の眼で見られ、あろうことか「敵」の一味とみなされる。当然その人間関係は壊れていく。「ゴル事件」の展開の中でツェランは多くの友人を失っていくのである。

相手を信じるとは、自分を信じることである。自分の思いを自分が信じる。その信じた部分が相手との回路になり、そこで初めて他者に対する信頼が生れる。信・不信の構造である。この構造が成立しなくなった時、そこにもはや人間同士の信頼はない。

【ジャン・ポール・サルトル宛の手紙】

ツェラン意識内部でこのように反ユダヤ主義が拡大していき、「ゴル事件」そのものが、事件よりはるかに巨大な概念である「反ユダヤ主義」の一環となる。「ゴル事件」が「反ユダヤ主義」の一部として認識され、「ゴル事件」は「反ユダヤ主義」の中に吸収されていくのである。

一九六二年一月、未投函に終わったがツェランは次のような手紙を、ジャン・ポール・サルトル宛に書いていた。一部を記してみよう。

> 数年来、とりわけ昨年から私は中傷キャンペーンの対象です。このキャンペーンの広がりと細分化は、一目見て文学界の中の陰謀というものをはるかに超えています。これはれっきとしたドレフュス事件なのです。（中略）この事件はドイツの本当の姿を映しだしている鏡なのです。ナチズムがたどることを心得ている――新たな――道はこの場合明らかに民族主義的ボルシェビズムの傾向にある一種の「左翼」とひそかに通じており、また同様に、こういった場合よくあることなのですが、かなりの数の「ユダヤ人」ともひそかに通じているのです。[21]

ツェランの意識を如実に表している文面と言えよう。このような意識からツェランは、自身へのビュヒナー賞授与も、ドイツ人が自分たちの過去の過ちに対して行った「アリバイ工作」の一つとみなしていくようになるのである。

【ペートレ・ソロモン宛の手紙】

次に引用する一九六二年四月二五日付ソロモン宛の手紙の一部もまたツェランの認識を明らかに示している。ソロモンはブカレスト時代の親友であり変わらずブカレストに居住していた。

しかしネオナチというのはなかなか複雑な現象だ。とりわけそれは画一的にならないようにかなり偽装を凝らしている。ドイツでは今ナショナリズムが復活している。昔の神話を現代という時代の要請に合わせて変えながら。文学界にしろ何処にしろ、仮装がそこの王様だ。現実がゆがめられた時代、虚言症の時代、倒錯の時代、ひどくドイツ的でヨーロッパ的な「結託した連中」の時代、心理的投射の時代、過去を巡るアリバイ作りの時代が今なんだ。すべてが両義的で裏表のある時代、あらゆる種類の「代替品」の時代……。[22]

そして同じくソロモン宛の一九六二年九月五日付の手紙。

ぼくができたかも知れないこと、それは書くのを止めることだったのかもしれない。けれどかつてナチ時代の恐怖を体験しながら、にもかかわらずドイツ語で書くことを選んできた詩人が、ここで自分の言葉からわが身を断ち切ることが、一体どういうことを意味するのか、君ならよくわかってくれると思う。彼らはとにかく何より、ぼくの周りに真空地帯を作り上げるすべを実によく心得ているのだ。それは時が経つにつれて耐え難い心理的圧力になる（いつか君に詳しく話せる日が来るといいのだが）。[23]

「真空地帯」では人は呼吸ができない。その苦しさ。「真空地帯」という表現は、ツェランの置かれた精神状態を端的に示すもので、心痛ましむるものがある。

五　「ゴル事件」前史

「ゴル事件」に至る前に前史とでも呼べるいくつかの事件があった。いずれもツェランが「反ユダヤ主義」と関係づけて理解した事件である。

【ヴェズレーにおけるラウバッハ事件】

一九五六年四月二八日から五月二日にかけてフランスのヴェズレーで、「現実を前にした作家」というテーマで第三回独仏作家会議が開かれた。ツェランやベル、シュレーアス、イルゼ・アイヒンガー、ロラン・バルト、マルグリット・デュラス、アラン・ロブ＝グリエなどが参加している。

ここで一人の女性参加者が私的な場においてではあるが「わたしはユダヤ人なんか大嫌い」という発言をした。これをベルやシュレーアスは問題にして、ユダヤ人参加者のツェランとアイヒンガーにその女性から謝罪の手紙を出させたのである。

「形式的な謝罪では問題解決にならない。また差別発言は人間性を傷つけるものであり、ユダヤ人参加者だけではなく、参加者全員に対して謝罪状を出すべきである」と考えていたツェランはこの処置に対して批判的であり、不

満の意をベルらに伝え、手紙などでやり取りをしている。

人権問題に対して敏感であり良心的な人間たちが参加していると考えられるこのような集まりにおいてなおこのような事件が起こること、またその事件に対してツェランから見るなら不十分極まりない対処で済ませたことは、ツェランを落胆させた。

【ボン大学事件】

「ナチズムとの再会が最近ボン大学の講義室でありました、詩を朗読した時のことなのですが」[24]とハーラルト・ハルトゥング宛の一九五八年一二月四日付手紙で記されることになる事件である。朗読は一九五八年一一月一七日ボン大学一〇番教室で行われた。

その場に居合わせていたジャン・フィルゲスの証言によれば以下のようなものである。

「フィルゲスは、二、三列前に坐っているフィルゲスも知っているケルン大学の学生の間を紙片が回っていることに気が付いた。そこには鎖に繋がれた奴隷が描かれ、その下に〈ホサナ、ホサナ〉という言葉が書かれていた。このカリカチュアを書いた男の目星はついたが本人は否定していた。朗読会の後に飲み会で仲間とツェランの詩について議論したが、この目星をつけた男は、〈ツェランの詩なんて、少しばかりのノヴァーリス、トラークル、リルケ、ゲオルゲにシュールレアリスムの霊液と一つまみの旧約の嘆きを混ぜて掻き混ぜればそれで出来上がりさ〉と言ってツェランの詩をこき下ろしたのである。[25]」

フィルゲスは当時ケルン大学の学生でツェランをテーマとして学位論文を書く予定だった。ツェランに質問をするため一九五七年にパリでツェランに会っている。ボン大学でツェランに挨拶した折、ツェランの方でもそれを記憶していた。フィルゲスは朗読会の感想と、このカリカチュアの件をしたためツェランに手紙を出したのである。

ツェランからはこのカリカチュアを書いたと思われる学生の名前を明かすように迫る返信がフィルゲスの許にきた。しかしフィルゲスは名を明かさなかったので、ケルン大学指導教授から学位論文受領拒否の脅しまで受けることになるのである。

一九六五年にフィルゲスがツェランに手紙を出すと短い返信があり、ツェランの方から和解を提案してきたのだという。フィルゲスは現在よく知られたツェラン研究者である。

この事件もゴル事件に繋がる一連の「ナチコンテクスト」に沿って解釈されていくのである。

【ネリー・ザックス】

ネリー・ザックス（一八九一―一九七〇）はユダヤ系ドイツ人である。一九六六年ノーベル文学賞を受賞している。一九四〇年強制労働につかされる間際に友人やスウェーデンの女性作家ラーゲルレーヴ（『ニルスの不思議な旅』で有名）の尽力でスウェーデン入国ビザを取得、老母と二人でストックホルムに渡った。ハンドバッグと僅か一〇マルクの現金だけが手許にあったという。四三年には恋人をユダヤ人迫害によって亡くしている。

「暗く冷たい陽の当たらぬ」小部屋に二人で住んでいたが、一九五〇年には母が死んでいる。一九五二年にスウェーデンの市民権を得ている。翻訳などで生計を立てていたが生活は恐ろしく苦しいものだった。ツェランは身近な

人間に、ザックスの詩を何よりも好んでいる、と言っていたらしい。

ツェランの方からザックスの詩を通して彼女に関心を示している。ザックスとツェランの友情は濃やかで心のこもったものになって行った。ザックスはツェランの詩集を枕頭に置き、不眠に苦しむ夜などは開いていたという。

一九五九年にツェランがマンデリシュタムの訳詩集をザックスに献呈した時、献辞でザックスに「姉」と呼びかけると、彼女は「弟」と応えている。「パリとストックホルムの間には苦痛と慰めの子午線が懸かっているのです」[26]とも彼女は記していた。

ペゲラー宛の一九六〇年八月九日付手紙には、「ネリー・ザックスは私たちにとって真の意味の兄弟のような友人なのです。彼女の詩は、とりわけ最初の詩集『死神の住む家で』においては、死者や迫害を受けた者たちとの対話になっているのです。彼女自身が今や迫害されています。ネリー・ザックスは七〇歳になる人です……雷雨のごとき出来事に襲われてきた七〇年を経た魂の茎なのです」[27]と書いていた。

一九六〇年、ザックスはドロステ=ヒュルスホフ賞を受賞、ドイツのメールスブルクを訪れる途中、チューリヒでツェラン一家と初めて会っている。ツェラン一家はスイスのチューリヒまでわざわざ出かけていったのである。五月二五日のことである。ツェランが五月三日にパリで『飯場詩人』に掲載されたクレールの「公開書簡」を読み、五月一〇日からドイツに出かけ、パリに戻ってすぐのことだった。この後六月にはザックスがパリのツェラン一家の許を訪れている。

ザックスはツェランがヘルダーリンのような精神病に陥るのではないかと深く心配していたが、実はザックスの方が不安な状況にあった。ザックスのツェラン宛の七月二五日付手紙では、「ナチの心霊術者組織が彼女を襲撃して

くる」[28]と記され、八月八日付手紙には、「私の周りには黒い網がかけられています」[29]とあり、八月一六日付手紙では「彼らが私の上に投げかけてきた恐怖と不安からなる網はまだ引き上げられていません」[30]とあった。

ザックスの精神状態が重篤なものになったとの知らせを受けたツェランは、八月三〇日に列車でパリを発ちストックホルムで六日間を過ごすことになる。しかしザックスにはついに会えずじまいだった。ザックスが「自分のせいで迫害者をツェランの許に引き寄せてはならない」と考え彼の入室を拒絶したからではないかと考えられている。彼女はこの時期「迫害者がひそかに家に入り込み壁で聞き耳を立てている」と信じていた。

一九六〇年は、以上記したようにツェランとザックスの間にも、大きな出来事があった年である。しかも反ユダヤ主義による迫害という同じ事態を共に体験していた。パリでツェランはザックスに「ゴル事件」について喋り続けたようである。そのことがザックスの精神状態を悪化させ、その悪化したザックスの精神状態がブーメランのようにツェランに戻り、ツェランの精神状態を悪化させたとも考えられる。

六　ブレッカー事件、あるいは詩「オオカミマメ」

ゴル事件前史の中で、とりわけ大きな影響をツェランに与えたのではないかと考えられる事件がある。それがツェランの詩集『言語という格子』に対するギュンター・ブレッカーの書評によって引き起こされた事件であった。その書評はベルリンの新聞《ターゲスシュピーゲル》一九五九年一〇月一一日に掲載されたものである。当時ベルリンに住んでいたツェランの知人がパリのツェラン宛に送りおそらく一七日にツェランが知ることになった。事件

の持つ重大さを考え「前史」の中で特別に一章を割いて記していきたい。

批評の大要は次のようなものである。

ツェランの詩に充溢しているメタファーは、現実から苦労して勝ち取られたものでもないし、また現実に仕えるものでもない。純粋に甘受され、より徹底的に見られ、よりよく理解された現実の形象は、彼の詩にあっては例外的なものである。彼の詩における形象言語は自らの恵みによって命を得ているに過ぎないのだ。読者は形象がある種自然発生している場に居合わせるのであり、次いでその形象は構成要素に分かたれた言語平面へと組み立てられていくのである。決定的なのはその考え方なのではなく、物の組み合わせなのだ。

ツェランが自然を担ぎ出す時でさえ、それは自然詩の意味における抒情的命名ではない。ツェランの詩においては図式的な拵えものが優位を占めているのだ。確かな存在感を持った感覚性の欠如は、その音楽性によっても必ずしも穴埋めすることができるわけではない。なるほど作者は『ケシと記憶』における多分に有名になった「死のフーガ」とか、新たな詩集における「エングフュールング」の例に見られるように、音楽的概念を好んではいる。しかしながらそれはむしろ楽譜の上での対位法の練習とか、音を出さぬまま鍵盤を弾いているようなものであり、十全な音の響きを解き放つわけではなく、目による音楽、視覚的な総譜とでもいったようなものなのである。これらの詩において、意味を付与する機能を果たすまでの響きに至っているのは極めてまれである。

ツェランはドイツ語に対しては大部分の詩人仲間よりも大きな自由を持っている。それはおそらく彼の出自

によるものであろう。言語の伝達的性格が彼を妨げたり、彼に負担をかけたりすることが少ないのだ。彼の詩の中では現実との接触を放棄していないものに説得力がある。詩「夜」における砂利や漂砂、それがたてる物音、あるいは詩「世界」の中の樹木の幹、それらこそが真の抒情的メタファーであり、「物の組み合わせ方」などを超えた彼方に存在しているものなのだ。この方向に歩んで行きさえすれば、〈現実に傷つきながら、しかしなお現実を求めて、自己の存在を賭けて言葉へと歩む〉とこの詩人自らが述べた意味における更なる発展が可能になると思われる。[31]

ツェランはこの書評を読んで激怒した。そしてすぐさま新聞編集部宛に一〇月二三日の日付で投書している。その投書はブレッカーの書評をなぞるようにして、ブレッカーの文章引用部分に下線を付しながら記したものであった。ツェランがとりわけ問題視したのが「ツェランの出自」を指摘した部分であった。ツェランはブレッカーが、ツェランがユダヤ人であることを匂わせ、反ユダヤ主義的言辞を弄したと理解したのである。後にブレッカーはそれを否定したが。

そしてまた「死のフーガ」や「エングフュールング」などが、現実とは無関係な図式的拵えものであり、対位法の練習向けの総譜のようなものだと記述したことにも激怒した。

【詩「オオカミマメ」】

一〇月二一日、新聞編集部への投書二日前にツェランは詩「オオカミマメ」を書いている。以下その一部を示そう。

門を下ろせ――
家の中にはバラがある。
家の中には七本のバラがある。
それは家の中にある
メノラだ。
私たちの
子どもは
それを知りながら眠っている。

（遠く、ミハイロフカ、
ウクライナで、
彼らが父と母を殺した――
何が
咲いていたろう、そこに、何が
咲いているだろう、今は？　何の
花が、お母さん
そこであなたに辛い思いをかけたのだろう

その名の故に？
ねえ、お母さん
あなたはその花をオオカミマメと呼んでいた、
それをルピナスとは呼ばなかった。

昨日
彼らの中の一人がやってきて
あなたを殺した
もう一度
私の詩の中で。
お母さん。
お母さん、誰の手と
ぼくは握手をしたのだろう、
あなたの
言葉を携えて
ドイツへ赴いたというのに？[32]

ツェランの詩とは思えないほどに直截的で分かり易い。

第三連で、「詩の中でもう一度母を殺した」と書いているのが、ブレッカーの書評のことである。「死のフーガ」を現実とは無関係な「拵えもの」とすることは、現実に生起した事実の否定であり、それはすなわち母が殺された事実の否定であった。つまりこのようにして「母はもう一度殺されたのである」。

ツェランはアインホルン宛の手紙の中でかつて次のように記していた。「ぼくは自分の存在と無関係な詩句はこれまで一行たりとも書いたことはない。――君は分かってくれると思うがぼくはぼくなりの仕方でリアリストなのだ」[33]と。

そして詩はまた、ツェランがハンス・ベンダー宛の書簡で示しているように、一人の人間の「真実」を、詩を読む者の心、魂に伝えようとする「真実の握手」なのだ[34]。

ところがブレッカーの書評は、単なる表現技術の位相からしか詩を捉えようとしない皮相浅薄なものだった。詩に対して謙虚に向かい合うことをしないブレッカーの文章は批評に値しないものであったろう。

「真実」を受け渡しできると信じ握手をしようとして差し伸べた手に、浅薄極まりない言葉、しかもツェランの心を深く傷つける言葉が返ってきたのである。母を殺した者、それはドイツ語を母語とする者であったが、今そのドイツ語を母語とする者の一人が再び母を殺したのである。ドイツ語で詩を書き、ドイツに「握手」を求めてやって来たのに、それに対する答えがこのようなものだった。一体自分は誰と握手をしようとしたのか？　握手ができると信じた自分が愚かだったのか？　ツェランの怒りや絶望が伝わってくる詩である。

メノラはユダヤ教徒が使う、七本に枝分かれした燭台である。詩の冒頭でツェランは自分がユダヤ人であり子孫もまたユダヤ人であり続けることを宣言しているのである。

当初ツェランはこの詩を発表するつもりであったが、ヒルシュやデームスの反対で中止した。あまりにも個人的な事柄の直截的表現であり詩ではない、というのがその反対の理由であり、その理由をツェランも受け入れたのである。

【単なる「的外れの書評」か、墓荒らしか】

激怒したツェランは、この書評をコピーして、一〇月一七日から三一日にかけて一〇人ほどの友人に送り付けた。友人たちはこの書評を単なる的外れの書評とみなした。例えばバッハマンは、ブレッカーは軽率に書評で侮蔑することがある、今回のケースに別の理由が考えられるのか、反ユダヤ主義が理由かどうかは私には確信が持てない、という意味の返事を出している。[35]

当時このバッハマンと暮らしていたフリッシュに対してもツェランは一〇月二三日に手紙を送っている。返事を書くのにフリッシュは大変苦労し、数日間午後ないし夜の時間をすべて潰して手紙書きに没頭、何度も書き直した手紙をようやく投函している。その中で彼は、ツェランの怒りの中にたとえどれほど僅かなものであれ虚栄心とか病的な功名心のかけらが混在していたとしたら、死の収容所の名前を持ち出すのは許しがたいことでありとてつもないことだと思うと記したのである。[36]「虚栄心」や「功名心（名誉心）」という言葉はどぎつい言葉であったろう。的外れの書評であったとして、その書評に腹を立てるのは自分の作品を高く評価してほしい、という気持ちがあるからではないのか、という問いかけであり、その気持ちは突き詰めるところ「虚栄心」とか「功名心」に行きつくであろう、とフリッシュは言っているのである。バッハマン同様にツェランの怒りをもっぱら書評の在り方から見て

いることが分かる。

これに対してツェランの怒りは全く異なる。詩から分かるように、彼はこの書評を事実そのものの否定であり、埋葬地も分からない母のための墓碑銘として書いた詩「死のフーガ」そのものを汚す、いわば墓荒らしの行為そのものと受け取ったのである。書評の受け止め方の次元が異なるのだ。ツェランの怒りが向かっているのは書評の在り方に対する怒りではない。母を汚す墓荒らしの行為としての書評なのである。

【すぐさま返事をよこさないことへの怒り】

しかもツェランの怒りに油を注いだことがある。それはツェランが墓荒らしと認識する重大な事件に遭遇して、助けを呼ぶ叫びを一〇人を超える友人たちに向かってあげたのに、すぐ返事をよこした人間がたった一人シュレアースのみだったということである。

最大限の怒りが向けられたのは当然のことながら最も心を許していたバッハマンであった。バッハマン宛にツェランが手紙を書いたのは一〇月一七日。バッハマンが返事を書いたのはようやく一一月九日のことだった。一〇月二三日から二五日までドイツで開かれていた四七年グループの会合に出席し、その後病気になったりしていたためである。その間ツェランは何度も電話をしていたが繋がらなかった。

【バッハマンとツェランの手紙のやりとり】

一一月九日のバッハマンの手紙に対して、一一月一二日にツェランは大要次のような返事を出している。

一〇月一七日に手紙を書いた――危難の時に。一〇月二三日になってもまだ何の返事も貰えなかったのでフリッシュにも手紙を書いた。それから何度か電話したが繋がらなかった。

君は――新聞で知ったのだが――四七年グループの会合に出かけていて短編で大きな称賛を得たらしいね。何をぼくが「死のフーガ」で書こうとしていたのかを君は知っている。つまりそれは母の墓碑銘であり、墓そのものなのだということを。ブレッカーは書評で墓を辱めたのだ。ぼくの母にはただこの墓しかないのだ。

フリッシュは虚栄心とか名誉欲とかの疑いをぼくにかけた。僕の危難の叫びにそうやって答えたのだ。「文学批評一般に対する我々の態度」などを持ち出しながら。

もう手紙も電話も本もよこさないでほしい。

母を思わずにはいられない。ジゼルと子どものことを思わずにはいられない。

さようなら。[37]

絶交状である。しかし直後一一月一七日に速達で絶交を撤回している。「助けを呼ぶ叫びだったことを理解してほしい。君はそれを聞いてくれなかった。君自身の許に君はいずに文学の許にいたのだ。フリッシュは叫びに対して文学的関心しか示さない」[38]と書いて。

その速達を受け取ったバッハマンは一一月一八日に次のような返信をしたためている。以下大要である。

丁度あなたの速達がきたところ、ありがたいことに！　再び呼吸ができるわ。昨日絶望のうちにジゼルに手

紙を書こうとしました。その手紙は書きかけのままそこにあります。

この数日あなたの手紙を受け取ってからの私の状態はひどいものでした。すべてが揺れ動き、崩壊しかけて、今も傷ついています。

私たちのことについて話さなければいけません。再び行き違いがあってはなりません。そんなことになれば私は滅ぶしかないでしょう。私がもうあなたの許にいない、そうではなくて文学産業の許にいる、とあなたは言いましたね。そんなことはありません。あなたは何ということを考えているのですか。私はいつも変わらず同じところにいます。

あなたの話を聞くつもりです。でもどうか私の言うことも聞いてください。私たちが言葉を見つけられることを祈っています。[39]

最も分かり易いツェランとバッハマンの例だけを引くに止めておきたいが、手紙を出した他の多くの友人たちに対しても、似たような怒りをツェランは覚えるのである。詩「オオカミマメ」はさらに以下のように続いていた。

お母さん、ぼくは
何通も手紙を書きました。
お母さん、返事は来ませんでした。
お母さん、それが返事だったのです。

お母さん、ぼくは
何通も手紙を書きました――[40]

【当然の反応か、発病の兆しか】

このブレッカー事件の時の友人たちに対する不信の念が、後の「ゴル事件」キャンペーンの折まで継続し、対人関係を破壊して行くのに与って力があったのではないかと思われる。見逃されがちだがブレッカー事件は実はツェランにとってかなり重く大きい出来事だったのではないかというのが筆者の推測である。

ところでブレッカーの書評に対する今まで述べてきたようなツェランの反応は、一体当然のことなのだろうか、それとも一種異様で理解に苦しむものなのだろうか？

最も普通に考えられるこういった場合の対処法はバッハマンも言っているようにブレッカーの書評を無視することであろう。しかしツェランにはそれができなかった。この書評が「死のフーガ」までを「拵えもの」として否定的に評価したことが、ツェランの核心部分を撃ったからである。「核心部分」、それは母への思いである。書評が、母の墓を汚すもの、墓を無いものとすることと同義と取った。そう取った人間が書評に対して激怒するのは理解できる。

問題はこの取り方、反応の仕方である。理性的に冷静に対応することがなぜできなかったのか。友人たちに訴え騒ぎまわることもせず一人でなぜ処理できなかったのか。書評の問題点の認識がずれてはいないか。様々な疑問が筆者には残るのである。

七　ツェラン周囲のツェランに対する視線――精神病発病の嫌疑

ツェランの言動からツェランの精神状態を疑い、彼が精神病を発病したのではないかと考える人たちが出てくる。ツェランの方でも自分に対するそのような視線を意識していた。

【ヘルマン・レンツ宛、そしてヴォルフガング・ヒルデスハイマー宛の手紙】

例えば一九五九年三月二一日付ヘルマン・レンツ宛の手紙の中ではおおよそ次のような記述がなされている。

「一一月にはボン大学での朗読会で事件があった。君はそんなことが可能だとは思えないだろうが。（中略）そしていわゆる〈政治参加する〉作家たち（アンデルシュとかベルなどだが）は、ぼくが〈過敏すぎる〉とか〈迫害妄想にかかっている〉とか思っているのだ。」[41]

そしてまたヒルデスハイマー宛の一九五九年一二月二三日付手紙には次のように記されている。

「私が〈過敏過ぎる者〉とか〈迫害妄想にかかっている者〉といった噂を立てられていることを知らないわけではありません。とりわけ四七年グループの間で。ヒトラーの子孫たちに関わる体験を私があなたにお話しした時、私は事実だけを申し上げてきました。ヒトラーもどきを、沈黙したまま甘受することはしない、それを私は私の――私のだけではないと思いますが――義務と考えているのだということを明らかにしようと努めてきたのです」。[42]

【デームス宛の手紙】

ツェランの親友だったデームス宛にツェランは次のような手紙を書いている。

まず一九五九年一一月末、未投函の手紙の要旨である。

君の手紙からインゲボルクが何も理解していないことが分かった。結局のところ人はいつもぼくの「過敏さ」と関係づける。フリッシュがぼくを傷つけるのではない。そうではなくぼく自身がそれ以前から辱めを受け気分を害されている人間として存在しているというわけだ。ぼくの方があるいは正しく物事を見ているのかもしれない、体験者だし、と考えることはないのだ。ほんのわずかでも、もしかしたらと考えることすら問題とはされないのだ。[43]

そして一二月四日の手紙。一部分の要旨を記そう。

インゲボルク宛に心からの手紙を書いた。彼女がブレッカー事件に――それはヒトラーもどきの事件なのだが――全く向かい合おうとしないことを指摘したのだ。しかしそれが何の役に立っただろうか。このパウル・ツェランを「過敏な者」としてしまえばなんと心穏やかになることだろう。丁度反ユダヤ主義者と名付けて済ますように。インゲボルクなど「ブレッカー事件など紙屑かごに捨ててしまったら」などというのだ。真実と良心に関わることを、紙屑かごにだよ！[44]

【そしてペゲラーの場合】

一九六〇年春とあるので、おそらくツェランがペゲラーに会った五月と考えられる。「二人でジーゲンゲビルゲからボンに向かって車を走らせていた時、ツェランが単なる妄想でしかない観念にそれて行ってしまうことが明らかになって愕然としたことがあった。（中略）当時ハインリヒ・ベルあたりから聞こえてきた〈ツェランは気が狂ってしまった〉という見解を私は頑固に受け入れまいとしていた。（中略）ウィーン時代からのツェランの親しい友人クラウス・デームスはそれに早くから気づいていたのだが」[45]。

【バッハマンの場合】

ツェランが自分を理解してほしいと最も強く願い欲していた相手はバッハマンであろう。バッハマンの方でもツェランを理解したいと強く望みその努力を重ねていった。その彼女にとってもツェランを理解することが困難になって行くのである。

以下ツェラン宛の未投函に終わった一九六一年九月二七日付の手紙の一部を抄訳で紹介しよう。理解が困難になって行く様相を如実に示すものである。他にも例示できるものはあるが最も分かり易いこの一通に止めておく。

二、三分前私たちは電話で話しました――でもまずもらった手紙に対する答えを書かせてください。私たち二人の間にあるものが誤解なのか、それとも説明を要する何ものなのかが私には解らないのです。

（中略）あなたが電話で、「謝らなければならないことがある」と言った時感じた驚きを今また感じています。

それであなたが何を言ったのかが私には解らないのです。でも私はまたしても不安になるのです、また私が苦い気持ちにさせられそうだからというわけではなく、すべてがあなたにとって良い方向に向かっていくようにと願ったり思いやったりするといった類いのことを越えてしまう、そのような友情を発揮することに対する勇気が萎えて行ってしまうことを感じるからなのです。

（中略）より大きな不幸はあなた自身の中にあるのだと私は本当にそう思うのです。外部からくる卑しいことにはなるほど毒があります、しかしそれは克服できるものですし、克服しなければならないものです。卑しいことに正しく対応することは、ただあなた一人にかかっているのです。あらゆる声明、あらゆる介入など、それが如何に正しかったとしても、それがあなたの不幸を減らさなかったことをあなたは解っています。あなたの言うことを聞いていると、まるですべてのことが一年前と何も変わっていないかの如くです。まるで多くの人たちの努力があなたにとっては無でしかなく、全く別のもの、汚れたこと、馬鹿げたこと、悪意でしかないようです。あなたはまた友人たちを失くしています、なぜなら彼らは自分たちがあなたにとってどうでも良い存在なのだと感じ、またあなたにとって必要と考えたあなたに対する異議申し立ても役に立たないと感じているからです。

（中略）そして私は自問するのです、私はあなたにとって何者なのだろうと、これほど長い年月をあなたと付き合ってきた私はあなたにとって何者なのだろうと。幻影なのですか、それとももう幻影にも対応していない現実なのですか。私の身には多くのことが起こりましたが、私は、今日、私であるところの者であろうと願っています。あなたはそんな私を感じ取っていましたか？　まさにそれが私には確かめられないのです、そして

そのことが私を絶望させるのです。

（中略）私はあなたを憎むことをしません、それは気狂い沙汰です。しかし何かがまっすぐに良い方に向かうためには、そのためには私に答えようと努めてください、単なる答えではなく、言葉ではなく、気持ちによって、行動によって。

（中略）私はジゼルのことをよく考えます。本当に彼女のことを考えるのです。そしてあなたにはない彼女の偉大さ忍耐強さに感嘆するのです。彼女の自己犠牲、彼女の素敵な誇り高さ、彼女の忍耐はあなたの嘆きより私にとって価値あるものです。[46]

バッハマンがツェランの言うことを理解できないこと、また逆にツェランがバッハマンの言うことを理解できないことに対する、苛立ちや不安、怒り、そして万策尽きた思いが感じ取れるのではないだろうか。

【周囲が理解できないツェランの対応】

ツェランの自己認識とは別に、周囲の人間にとって理解不能なツェランの対応が続いた。以下その対応の例をいくつか挙げていこう。

一九六一年五月に、ペーター・ヨコストラがツェランに詩集『星に降る』を献呈し、献辞として「あなたの夜。あなたが私を呼ぶ。私は聞く」と書いた、その「夜」が、ツェランが精神病を発病したことへの当てこすりと取ったのである。

あるいは一九六一年六月二八日付『前進』誌に掲載されたロルフ・シュレーアスの「文学スキャンダル」と題された記事に対する反応。シュレーアスはツェランの長年の友人であり、ツェランとおそらく最も真摯に向かい合っていた人だった。この記事でシュレーアスはツェランを強く擁護して、ツェランを本物の天才と呼び、これらすべての事柄が、詩人パウル・ツェランに無実の重荷に耐えかねて崩壊する人々の運命を齎したのだ、と書いて記事を結んだのである。この「崩壊」という言葉をツェランは自分の精神病発病への当てこすりと解したのである。これ以後ツェランとシュレーアスとの友情は破綻する。

そして一九六一年七月八日付デームス宛の手紙の中でもなお「名誉棄損は殺人だ。エクスナーはその首謀者の一人なのだ」と書いていた。エクスナーにはすでに述べたように六一年五月に手紙を書いていたのだが。しかも一時大きな信頼を寄せていたヒルシュに関して、「ヒルシュには、ほんのわずかな信頼さえ寄せることができない、君もそれを覚えておいてほしい、ぼくは今自分が何を言っているのかよくわきまえている」とすら記すのである。[47]

あるいは、一九六二年一月二〇日付『行為』誌に掲載されたカール・クローロの記事に対する反応。クローロはここで「近年の抒情詩人は〈もはや存在しない〉人間であるように見える」と書いていた。この言葉をツェランは、自分がナチの最終解決と同じようにその存在を抹殺されたのだと理解したのである。

また一九六二年に発表されたツェランの親しい友人ペゲラーの論文においても自分の精神病発病に対する当てこすりがなされていると解釈した。

「反ユダヤ主義のツェラン意識内部での拡大」ですでに記したように、ツェランの意識の中では、味方のふりをして敵対する者が、反ユダヤ主義者として位置づけられていくのである。ツェラン自身の判断に百パーセント同調し

ない者は、味方のふりをしているだけの者とされ、敵と分類されていく。当然のことながら友人との関係は壊れていき、ツェランは孤立し、その孤立がまたツェランの猜疑心を増幅していくのだ。悪循環である。

そしてついに一九六二年六月一七日付ツェラン宛手紙で、ツェランのただ一人と言ってもよい親友クラウス・デームスが次のように書くことになるのである。

ぼくがよく知っているように、君がこれほど長い間ぼくに愛情を持っていてくれたのだとしたら、君がぼくの愛情を感じていてくれたのだとしたら――それだったらぼくの人生で書くのが最も困難だったこの手紙に書かれていることにできる限り耳を傾けてほしい。ぼくは君に法外なこと、極端に良からぬことを言わなければならないのだ。

これから言うことがぼく一人だけの考えから出たこと、誰からも影響を受けたのではないこと、ただぼく一人が君に向かって話すことであることを君に誓う。すべては君がそれを信じてくれるかどうかにかかっているのだが。

ぼくが君に言わなければならないことを君はおそらく信じないだろう――奇跡が起きればよいのだが。なぜならこのわずかなチャンス、最後のそして可能な最期のチャンスは、君に対する友情に与えられたチャンスであるからこそ、ぼくは君に言わなければならないのだ。

パウル、ぼくは君がパラノイアの病にかかっているのではないかという、驚愕すべきしかし全く確かな疑い

を持っているのだ。[48]

この手紙を受け取ったツェランは、デームスとの交友を絶ってしまう。二人の間に交友が復活するのは、一九六八年一二月二日付のデームス宛の手紙をツェランが書いてからである。入院中の精神病院からの手紙だった。

八　「ゴル事件」の原因と結果

ツェランの精神をこの上なくひどく消耗させていった「ゴル事件」。その背後に「反ユダヤ主義」が潜んでいると信じ、反ユダヤ主義、すなわち「ヒトラーもどき」に対しては、沈黙するのではなく「闘うこと」こそが人間としての義務であると信じてツェランは闘い続けた。

【ゴル事件の原因】

この「ゴル事件」の原因は一体何だったのであろうか？　なぜクレール・ゴルはこれほど執拗な誹謗中傷をツェランに対して続けたのだろうか？

「ツェランはクレールの求愛をすげなく断ったらしい」という噂があることをツェランはエミール・シオランから聞いていた。[49] またクレール自身が何人かに「ツェランは非人間的でとりわけ下卑た仕方で私に〈接してきたのだ〉」と話していた。明確にその内容を話すことはせずに。[50] 罪あるものが無辜の者に罪をなすりつけるために逆に激しい

告発者となることは精神科医の眼から見ると珍しいことではないらしい。

トーマス・シュパルは、三〇歳年上の女性のツェランに対する思いが裏切られたので生じた、ツェランへの強い憎しみが起こした「最初から不幸な事件」だったのではないかと推測している。[51] そうであるとするなら男女間で起こり得るひどく人間的な、しかし重く底の知れないどす黒い思いがこの事件を引き起こしたことになる。恐ろしいことである。

【詩集『非在のバラ』、あるいはツェランの狂気】

詩集『非在のバラ』は、一九五九年から一九六三年にかけて書かれた詩五三編を収めた詩集である。五九年に書かれた詩は四編のみ。殆どが六〇年から六二年に書かれている。ツェランが出版社のフィッシャーに完成原稿を送ったのは六三年五月だった。

ツェランが、反ユダヤ主義そして反ユダヤ主義の表れであると解していたゴル事件と闘い続けた期間と丁度重なっている。ツェランの周囲の世界は悪意と敵意に満ちており、身の周りの者たちは明らかな反ユダヤ主義者か、味方を装った反ユダヤ主義者ばかりである。深い孤立感の中、自分の身の周りに「真空地帯」が生み出され、身の周りの空気が薄くなり、息苦しくなっていく。

自分は神経過敏な被害妄想の人間とされ、精神病を発病したと見られている。自分の言葉、自分の詩、自分の存在そのものが疑念を持って見られ、あるいは否定されてしまう。それこそ「迫害」そのものである。こういった状況下で書かれていったのが、詩集『非在のバラ』に収められている詩群であった。

詩人であるツェランはもちろん自分の言葉、自分の詩を信じている。しかしそのツェランが、親友のデームスからもパラノイアとみなされ、自分の言葉を信じてもらえなくなるのである。

このような中、一九六二年一二月末、家族と共にスキーに行っていたツェランが通りがかりの見知らぬ男を「ゴル事件に加担したな」となじり掴みかかったのである。ツェランの状態を見て帰宅を早めた帰途、車中でツェランはジゼルが首に巻いていた黄色いスカーフがナチ時代のユダヤ人の印として身につけさせられたダビデの星を思わせるとして、首から引きはがしたのである。帰宅後ツェランは精神病院に入院した。

これ以後ツェランは入退院を繰り返していくことになる。

ゴル事件が引き金になって精神病が発病したのか、それともたまたま発病の時期と事件とが軌を一にしただけなのか筆者には判断できない。しかしこれ以後「狂気」がツェランの後半生と詩作とを規定していく最も重く大きな要素となって行くのである。

ツェランは、後には自分が「病気である」ことを受け容れるようになる。そしてその後もなお詩作を続け、詩集を刊行していく。自分の脳裏に浮かぶ言葉を、ツェランはしかし十全になお信じられたのであろうか。自分の言葉に対して疑念を持ち、不安が湧いてくることはなかったのだろうか。

このような状況下でなお詩を書き続けたことに、筆者は驚きと感嘆の念を持たざるを得ない。

注

(1) Barbara Wiedemann : Paul Celan, Die Goll-Affäre, Suhrkamp, 2000, S. 839. 以下 GA と略記。
(2) Paul Celan : Briefe 1934–1970, Suhrkamp, 2019, S. 62 f. 以下 Briefe と略記。
(3) Barbara Wiedemann : a.a.O., S. 171 f.
(4) Ebd., S. 175.
(5) Paul Celan-Gisèle Celan-Lestrange : Briefwechsel, Suhrkamp, 2001, S. 13.
(6) Barbara Wiedemann : a.a.O., S. 187.
(7) Ebd., S. 251 ff.
(8) Ebd., S. 303.
(9) Ebd., S. 224 f.
(10) Ebd., S. 245.
(11) Ebd., S. 623.
(12) Ebd., S. 627.
(13) Ebd., S. 498 f.
(14) Paul Celan : Briefe, S. 435 f.
(15) Barbara Wiedemann : a.a.O., S. 514.
(16) Ebd., S. 514.
(17) Paul Celan, Klaus und Nani Demus : Briefwechsel, Suhrkamp, 2009, S. 406.
(18) Barbara Wiedemann : a.a.O., S. 409 f.
(19) Paul Celan, Nelly Sachs : Briefwechsel, Suhrkamp, 1993, S. 29.
(20) Barbara Wiedemann : a,a.O., S. 828 f.
(21) Ebd., S. 543 f.
(22) Petre Solomon : Briefwechsel mit Paul Celan 1957–1962, in : Neue Literatur, Jg.32, Hft. 11, 1981, S. 66 f. S. 76 f.

(23) Ebd., S. 78 f.

(24) Paul Celan : Briefe, S. 341.

(25) Jean Firges : Ein Satyrspiel? Kommentar zu Paul Celans Lesung in Bonn, 17. November 1958, in : Celan-Jahrbuch, 8 (2001/02), 2003, S. 331ff.

(26) Paul Celan, Nelly Sachs : a.a.O., S. 25.

(27) Paul Celan : Briefe, S. 464.

(28) Paul Celan, Nelly Sachs : a.a.O., S. 52.

(29) Ebd., S. 55.

(30) Ebd., S. 57.

(31) Günter Blöcker : Gedichte als graphische Gebilde, in : Tagesspiegel, Berlin, 1959. 10. 11. Arno Barnert : Eine „herzgraue“ Freundschaf. Der Briefwechsel zwischen Paul Celan und Günter Grass, in : Text, Hef. 9, Stromfeld/Roter Stern, 2004, S. 104.

(32) Paul Celan : Gesammelte Werke in Sieben Bänden, Bd. 7, Suhrkamp, 2000, S. 45 f.

(33) Paul Celan, Erich Einhorn : Briefwechsel, Friedenauer Presse Berlin, 1999, S. 3.

(34) Paul Celan : G.W., Bd. 3, S. 177.

(35) Ingeborg Bachmann, Paul Celan : Herzzeit, Briefwechsel, Suhrkamp, 2008, S. 126.

(36) Ebd., S. 170 f.

(37) Ebd., S. 127 f.

(38) Ebd., S. 128.

(39) Ebd., S. 128 f.

(40) Paul Celan : G.W., Bd.7, S. 46.

(41) Paul Celan : Briefe, S. 354.

(42) Ebd., S. 408 f.

(43) Paul Celan, Klaus und Nani Demus : a.a.O., S. 285.

(44) Ebd., S. 288.
(45) Otto Pögeller : Der Stein hinterm Aug. Studien zu Celans Gedichten, Fink, 2000, S. 9.
(46) Ingeborg Bachmann, Paul Celan : a.a.O., S. 152 f.
(47) Paul Celan, Klaus und Nani Demus : a.a.O., S. 415.
(48) Ebd., S. 435.
(49) Barbara Wiedemann : GA, S. 828.
(50) Ebd., S. 828.
(51) Thoms Sparr : Todesfuge, Biographie eines Gedichts, DVA, 2020, S. 189.